

古文II

「古文Ⅱ」の特長と使い方

●本書のねらい

このテキストは、古文読解の基礎を身につけた高校生が、基本事項を確認しながらよりレベルの高い読解力を養うことができるように編集されています。

古文にだいたい慣れてきたな、と思っても、なかなか現代文を読むように内容をスラスラ読みとる（現代文といえども、難解な文章の内容を読みとるのは一苦労ですが）ことはできません。基本事項を身につけた後、多くの古文を読んで読解の演習をすることが、読解力向上のために不可欠です。このテキストも、いろいろなジャンルの文章を読むことにより、幅広い知識と読解力をつけることをねらいとしています。

●本書の特色

- このテキストは、「設問パターン別演習編」と「ジャンル別読解演習編」で構成されています。
- 「設問パターン別演習編」では、古文読解問題の設問をパターン別に分類し、その解法のポイントを示しています。各設問パターン別に集中的に演習をつむことができます。
- 「ジャンル別読解演習編」では、入試レベルの読解問題で総合的な読解力を養うことができます。
- 各回の「基本確認ドリル」で古文読解のための基本事項を繰り返し学習できるようになっています。

●本書の構成と使い方

設問パターン別演習編

- 例文演習……………各設問パターンの解法のポイントをとらえます。
- 基本演習……………「例文演習」の類題で、解法のポイントが理解できたかどうか確認します。
- 演習……………各設問パターンの解法を繰り返し演習して定着させます。

ジャンル別読解演習編

- ジャンル別に読解問題を集め、「設問パターン別演習編」で身につけた解法を、入試に結びつく実践的な読解力とするための演習をつみます。
- 基本演習……………基本レベルの演習問題です。解けなかった問題は、「設問パターン別演習編」で解法を確認しておきましょう。
 - 演習……………入試レベルの実戦演習です。

《解答・解説(別冊)》……………解答例とともに、詳しい「解説」と「口語訳」がっています。

目次

設問パターン別演習編

①	主語（動作の主体）を指摘する	4
②	空欄補充問題（内容）	8
③	空欄補充問題（文法）	12
④	指示語の内容をとらえる	16
⑤	会話文を指摘する	20
⑥	敬語に関する問題	24
⑦	現代語訳（語句）	28
⑧	現代語訳（文）	32
⑨	まぎらわしい語の識別	36
⑩	主題・要旨に関する問題（1）	40
⑪	主題・要旨に関する問題（2）	44
⑫	古文の修辞法に関する問題	48

ジャンル別読解演習編

①	随筆（1）	52
②	随筆（2）	56
③	物語（1）	60
④	物語（2）	64
⑤	説話（1）	68
⑥	説話（2）	72
⑦	日記	76
⑧	紀行	80
⑨	評論（1）	84
⑩	評論（2）	88
⑪	韻文	92

設問パターン別演習編

① 主語(動作の主体)を指摘する

例文演習 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

これも今は昔、比叡の山に児ありけり。僧たち、宵のつれづれに、いざかきもちひせんと言ひけるを、この児、心寄せに聞きけり。さりとして、しいださんを待ちて寝ざらんもわりかりなと思ひて、片方に寄りて、寝たるよしにて、いでくるを待ちけるに、既にしいだしたるさまにてひしめき合ひたり。この児、さだめておどろかさんずらんと、待ちゐるに、僧の、もの申し候はん。おどろかせ給へと言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへんも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへんと、念じて寝たり。

○ 語句注 ○ 比叡の山——京都市の北東にある比叡山。延暦寺がある。 児——寺院に召し使われた少年。 かいもちひ——ぼたもちの類。 心寄せ——関心をもつこと。

よし——そぶり。 おどろかす——目をさまさせる。 起こす。 もの申し候はん——もしもし。 呼びかけの言葉。 いらふ——返事をする。 念ず——我慢する。

問一 ①——線部1～6の主語(動作の主体)を文中の語で答えよ。また、②——線部A・B

の述語はどれか、それぞれ一文節で示せ。

- ① 1 () 2 () 3 () 4 () 5 ()
 6 () ② A () B ()

問二 ~~~~~線部にはどういう気持ちがあるか、次から適するものを選び符号を○で囲め。

- ア もしも寝てしまったら食べられない。
 イ 寝ていないと手伝わされる。
 ウ 夜遅くまで起きていたらしかられる。
 エ 食いしん坊だと思われたくない。

【解法のポイント】

● 主語とは、「何が——何だ」「何が——どんなだ」「何が——どうする」の「何が」にあたるものであり、問いの——線部の動作をする人(もの)である。

問一①は、一つを除くと人物が答えである。だがその動作をするのかを考えよう。

● 問二は、「ただ一度にいらへんも……呼ばれていらへん」と同じ気持ちである。一緒に考えよう。

● 主語をとらえるためのポイント

- ① 登場人物を読み取ること。この時に作者を忘れてはいけない。
 ② 登場人物は文中で別の呼び方をされる場合があるし、指示語がついて「この人」などと呼ばれることもある。それに惑わされないこと。
 ③ 敬語の使用法に注目する。

5 主語（動作の主体）を指摘する

基本演習 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

大藏卿ばかり耳とき人はなし。まことに蚊のまつげの落つるをも聞きつけ給ひつべうこそありしか。

職の御曹司の西面に住みしころ、大殿の新中将宿直にて、ものなどいひしに、そばにある人の、「この中将に扇の絵のこと言へ。」とささめけば、「いま、かの君の立ち給ひなんにを。」と、いとみそかにいひ入るるを、その人だにえ聞きつけて、「なにとか、なにとか。」と耳かたぶけ来るに、遠くみて、「にくし。さのたまはば、今日は立たじ。」とのたまひしこそ、いかで聞きつけ給ふらんとあさましかりしか。

○ 語句注 ○ 大藏卿——大藏省の長官。 耳とき人——耳の鋭い人。 職の御曹司——

中宮に関する事務を扱った中宮職内の部屋を、仮の中宮御所としたものをいう。 大殿

の新中将——大殿は大臣の敬称。大臣家の人で新しく近衛府の中将に任命された人。

宿直——夜間、天皇や貴人のそばに仕えて相手をする事。 なにとか、なにとか——

なんですって、なんですか。

問一 —— 線部 1～6 の主語（動作の主体）はだれか。

1 () () () ()

3 () () () ()

5 () () () ()

問二 —— 線部 A「かの君」、B「その人」とはだれか。

A () () () ()

B () () () ()

基本確認ドリル

1 例文演習の次の部分を品詞ごとに／で区切れ。

この 児、さだめて おどろかさ さん ずらんと、

● 代名詞と二つの助動詞に注意。

2 例文演習の次の部分を現代語訳せよ。

待ちけるかともぞ思ふとて、

● 「もぞ」の訳し方に注意する。

3 基本演習の次の部分を現代語訳せよ。

その人だにえ聞きつけて、

● 「だに」と「え……打消」の訳し方に注意。

4 基本演習の —— 線部 6 を現代語訳せよ。

() () () ()

演習1

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

ある君達に忍びて通ふ人やありけむ、いとうつくしき児さへ出で来にければ、^Aあはれと思ひ聞こえながら、^Bきびしき片つ方やありけむ、絶え間がちにてあるほどに、^C思ひも忘れずいみじう慕ふがうつくしう、時々は、ある所に渡しなどするをも、『いな』^Dなども言はでありしを、ほどへて立ち寄りたりしかば、いとさびしげにて、めづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見るたりしを、え立ちとまらぬことありて出づるを、ならひにければ、例のいたう慕ふが^Eあはれにおぼえて、しばし立ちどまりて、『さらば、いざよ』とて、かき抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前なる火取りを^F手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出でば^G薫物のひとりやいとと思ひこがれむと忍びやかに言ふを、屏風の後に^H聞きて、いみじうあはれにおぼえければ、児もかへして、そのままになむ居られにし。(『堤中納言物語』)

○ 語句注 ○ 君達——高級貴族の子息や女子。ここは姫君。 片つ

方——もう一方の女。本妻をさす。 ある所に渡しなどする——男の自宅に連れていったりする。 いな——いけません。困ります。 え立ちとまらぬこと——止まってられないこと。 ならひにければ——習慣になつていたので。 いざよ——さあおいで。 火取り——衣に香を焚きしめる香炉。 あくがれ出でば——あなたを慕って浮かれ出ていくならば。 ひとり——薫物の火取りと自分一人を掛けてある。

問一 この文の登場人物は、①君達・②忍びて通ふ人・③児である。

——線部1〜7の動作の主体(主語)はだれか、右の番号で記せ。

1
2
3
4
5
6
7

問二 ——線部1と7の「あはれ」の意味を書け。

1 ()
7 ()

問三 ——線部A・Bの「ば」の違いを説明せよ。

A ()
B ()

演習2

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を¹拝まざりければ、心憂くおぼえて、あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩より²まうでけり。極楽寺・高良などを³拝みて、かばかりと心得て⁴帰りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、⁵尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、⁶山までは見ず。」とぞ言ひける。

少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。(『徒然草』第五二段)

○ 語句注 ○ 仁和寺——京都市右京区にある真言宗御室派の総本山。

7 主語（動作の主体）を指摘する

問二

線部1～4の動作の主体（主語）を答えよ。

- ①
②
③
1

問一

この文で「仁和寺にある法師」は大変な失敗をした。①どのような失敗をしたのか、**語句法**を参考に具体的に述べよ。②その失敗の原因はどこにあったか、原因を示す部分を古文から抜き出して示せ。③これに対して、作者はどのような主張をしたか、自分の言葉で述べよ。

石清水——京都府綴喜郡八幡町の男山山上にある石清水八幡宮。
極楽寺・高良——男山の麓にある八幡宮付属の寺社。 しばかり
と——この程度だと。 なたへの人——傍らの人。仲間。そ
も——それにしても。 ゆかしかりしかど——行ってみたかつ
たが。 本意——本来の目的。 先達——案内役。指導者。

演習3

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

- 4 3 2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに、「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。
〔枕草子〕第二九九段

○語句注 ○ 御格子参りて——御格子を下ろして。 炭櫃——囲

炬裏。角火鉢の説もある。 香炉峰の雪——中国の詩人白居易の

詩句に、「香炉峰の雪は簾を撥けて見る」とある。

問一

線部1～4の動作の主体（主語）を答えよ。

- 1 2 3 4

設問パターン別演習編

5 会話を指摘する

例文演習 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

高名の木登りといひし男、人を掎おきて、高き木に登らせて梢こづえを切らせしに、いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、降るときに、軒長のまたげばかりになりて、過ちすな。心して降りよと言葉をかけはべりしを、かばかりになりては、飛び降るとも降りなむ。いかにかく言ふぞと申しはべりしかば、そのことに候ふ。目くるめき、枝危ふきほどは、己が恐れはべれば申さず。過ちは、安き所になりて、必ずつかまつることに候ふと言ふ。

〔徒然草〕第一〇九段
 ○語句注 ○掎てて——指図して。 軒長——軒の高き。 目くるめき——目がくらみ。
 安き所——やさしい所。 つかまつる——「す」「なす」「おこなふ」などの丁寧語。

問一 右の古文には三か所の会話文がある。それぞれの会話の初めと終わりの三字ずつを抜き出して示せ。

問二 ——線部1・2の「申す」の主語はそれぞれだれか。

1	2
---	---

【解法のポイント】

● 会話文のとらえ方

- ① 「言はく」「言ふやう」「問へば」などがあれば、その下から会話文と考えてよい。
- ② 「と」「とて」などの語が会話文を受ける主な語であるから、この語の前までが会話文である。
- ③ 会話文には丁寧語の「侍り」「候ふ」や詠嘆の「かな」・禁止・命令の表現が多く使われることを知ろう。

● 問一 文中の三か所の会話文は、いずれも「と」を受けている。これに着眼する。初めに「言はく」などはないが、初めは文脈を追ってつかむ。

● 問二 登場人物は高名の木登りといひし男と、高い木に登った男だけではない。文には作者がいるのを忘れてはいけないのである。

基本演習 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

五月ばかり、月もなういと暗きに、女房やさぶらひ給ふと、声々していへば、出でて見よ。例ならずいふは誰ぞとよと仰せらるれば、こは、誰そ。いとodorodoroshū、きはやかなるはといふ。ものはいはで、御簾をもたげてそよろとさし入る、呉竹なりけり。おい、この君にこそといひわたるを聞きて、いざいざ、これまづ殿上に行きて語らむとて、式部卿の宮の源中將、六位どもなど、ありけるは任ぬ。

(枕草子「第一三七段」)

○語句注 ○ 女房やさぶらひ給ふ——女房方はおいでですか。「さぶらふ」は貴人のそばに仕えていること。 誰ぞとよ——だれかしらね。「とよ」は連語で感動を表す。 odorodoroshū おどろしう、きはやかなるは——おおげさで、突拍子もないことだわ。「きはやかなり」は、きわだっていること。 そよろ——がさりと。 擬声語。 おい——おやつ。ま あ。この君——中国の故事に由来する竹の異名。 いひわたるを——言うのを。「わたる」の意は不明。 殿上に行きて語らむ——清涼殿の殿上の間に行つて(竹の故事を知つていたことを、皆に)話そう。 式部卿の宮の源中將——式部省の長官である親王のお子様源頼定中將。 六位ども——六位の藏人たち。

問一 問題文の会話文の部分をすべて「」でくくつて示せ。

問二 式部卿の宮の源中將・六位ども以外の登場人物を二人書け。

問三 ——線部1〜3の動作の主体(主語)を書け。

1 () () ()
2 () () ()
3 () () ()

基本確認ドリル

1 次の古語の読み方を、古語の右側に現代かなづかいで書け。

殿上人 藏人頭 近衛府
女御 更衣 内侍
舍人 采女 上達部

2 上の文の次の——線部を文法的に説明せよ。

誰ぞとよと仰せらるれば、

●文法的に説明するときのポイント

- ① 品詞名と、活用語は活用の種類と活用形を必ず書く。
- ② 助詞・助動詞は種類と意味を書く。
- ③ 敬語は敬語の種類を書く。

演習 1

次の「無名抄」の一章を読み、あとの問いに答えよ。

俊恵いはく、五条三位入道のもとにまうでたりしついでに、御詠の中には、いづれをかすぐれたりとおぼす。よその人さままに定めはべれど、それをば用ゐはべるべからず。まさしく承らんと思ふと聞こえしかば、

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里

これをなん、身にとりてはおもて歌と思ひたまふると言はれしを、俊恵またいはく、世にあまねく人の申しはべるは、

おもかげに花の姿を先だてて幾重越え来ぬ峰の白雲

これをすぐれたるやうに申しはべるはいかにと聞こゆれば、いさ、よそにはさもや定めはべるらん。知りたまへず。なほみづからは先の歌には言ひ比ぶべからずとぞはべりしと語りて、これをうちうち申ししは、かの歌は「身にしみて」といふ腰の句のいみじう無念におぼゆるなり。これほどになりぬる歌は、景氣を言ひながして、ただ空に身にしみけんかしと思はせたるこそ、心にくくも優にもはべれ。いみじう言ひもてゆきて、歌のせんとすべきふしを、さはと言ひ表したれば、むげにこと浅くなりぬるとて、その次に、わが歌の中には、

み吉野の山かき曇り雪降ればふもとの里はうちしぐれつつ

これをなん、かのたぐひにせんと思つたまふる。もし世の末におぼつかなく言ふ人もあらば、かくこそいひしかと語りたまへ、とぞ。

○ 語句注 ○ 俊恵——東大寺の僧で歌人。「無名抄」の作者鴨長明の

歌道の師。 五条三位入道——「千載和歌集」の撰者、藤原俊

成。 御詠——お詠みになった歌。 よその人——ほかの人。

世人。 夕されば——夕方になると。 深草の里——今の京

都市伏見区深草付近。 おもて歌——代表的な歌。 おもか

げに花の姿を先だてて——（遠くの白雲を満開の桜の花かと思ひ、

その桜の花を）幻影として見て追いながら。 腰の句——第三

句。 これほどになりぬる歌——これだけ立派にできた歌。

景氣を言ひながして——自然の情趣を（主観を交じえずに）あつ

さり表して。 空に——それとなく。 心にくくも優にも——

奥ゆかしくも優美でも。 歌のせん——歌の中心。 眼目。 さ

はと——はっきりと。 こと浅く——内容に深みがなく。 お

ぼつかなく——よくわからないと。

問一 俊恵が作者に語った会話文三か所を、上の古文をそれぞれ

「 」でくくって示せ。

問二 俊恵が五条三位入道に話した会話文二か所の、初めと終わりの三字ずつを記せ。（句読点は字数に加えないので除くこと）

問三 五条三位入道が俊恵の問いに答えた会話文二か所の、初めと終わりの三字ずつを記せ。（句読点は字数に加えないので除くこと）

問四 — 線部1・3を現代語訳せよ。



問五 — 線部2は何をいうか、文中の四字で答えよ。

演習2 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

行く春を近江の人と惜しみけり はせを

先師いはく、尙白が難に、近江は丹波にも、行く春は行く歳にもふるべしと言へり。汝いかか聞きはべるや。去来いはく、尙白が難当たらず、湖水朦朧として、春を惜しむにたよりあるべし。ことに今日の上にはべると申す。先師いはく、しかり、古人もこの国に春を愛すること、をさをさ都に劣らざるものを。去来いはく、この一言心に徹す。(A) 近江に給はば、いかでかこの感まします。行く春丹波にまさば、もとよりこの情浮かぶまじ。風光の人を感動せしむること、真なるかなと申す。先師いはく、汝は、去来、ともに風雅を語るべき者なりと、ことさらに喜び給ひけり。

○ 語句注 ○ 近江 — 今の滋賀県。 先師 — 亡くなった先生。

尙白・去来 — 芭蕉の門人。 難 — 非難。 丹波 — 今の

京都府の西部と兵庫県の一部。 ふるべし — 置き換えられる

だろう。 朦朧として — ぼんやり霞んで。 たより — ふ

さわしいもの。 今日の上 — 現実の体験に基づいた実感。

古人 — 昔の歌人・文人。 をさをさ — 少しも。 ものを

詠嘆の終助詞。 徹す — 心に深く感じ入る。 ましま

さん — 「まします」は「あり・をり」の尊敬語。 ゐまさば

「ます」は尊敬の補助動詞。 風雅 — ここは俳諧をいう。

問一 先師と去来の会話文をすべて、上の古文に「」でくくって示せ。

問二 — 線部1「この国」とはどこか、次から選び符号を○で囲め。

ア 近江 イ 丹波 ウ 江戸 エ 日本

問三 (A) に適する言葉を文中から書き抜いて示せ。

()

問四 — 線部2「この情」とは何をいうか、六字以内で記せ。

問五 この古文の内容として正しいもの二つの符号を○で囲め。

- ア はせを先師の門下で、去来・尙白ははせをの門下である。
- イ 先師ははせをと去来を共に俳諧を理解している者とはめた。
- ウ 尙白ははせをの句を、表現の必然性に欠けると非難した。
- エ 去来は、その国にはその国の文学的伝統があると理解した。
- オ 山国の丹波では真に風景が人を感動させないと去来は知った。

演習 1

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

村上の先帝の御時に、雪のいみじう降りたりけるを、様器に盛らせ給ひて、梅の花をさして、月のいと明かきに、「これに歌よめ。いかがいふべき。」と兵衛の藏人に賜はせたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌など詠むは世の常なり。かく折にあひたることなん言ひがたし。」とぞ仰せられける。おなじ人を御供にて、殿上に人さぶらはざりけるほど、たたずませ給ひけるに、炭櫃に煙りの立ちければ、「かれはなにぞ、と見よ。」と仰せられければ、見て帰りまゐりて、

わたつ海の沖にこがるる物見ればあまの釣りしてかへるなりけりと奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りて焼くるなりけり。

(枕草子「第一八二段」)

○ 語句注 ○

村上の先帝——村上天皇のこと。

様器——詳しく

は不明、金属製または陶製の食器。

兵衛の藏人——女房の名。

雪月花の時——白居易の詩の一節に「琴詩酒の友は皆我を抛ち、

雪月花の時最も君を憶ふ」がある。めで——「めづ」は、ほ

める。殿上——帝のおられる清涼殿の殿上の間。炭櫃——

囲炉裏。一説に角火鉢。と見よ——ちよつと見てこい。

沖にこがるる——「沖に漕がるる」と「熾(赤くおこった炭火)

に焦がるる」の掛詞。あま——漁師。

問一 右の古文は二つの段落に分けられる。第二段落の初めの五字を示せ。

問二 ——線部1、「めで」た理由を一つ、簡潔に述べよ。

〔 〕

問三 ——線部2の「折」とはどういう折か。

〔 〕

問四 ——線部2の文には誤りがある。文法的に正しく直して書け。

〔 〕

問五 ——線部3・4の主語はだれか。

〔 〕

問六 「わたつ海の」の歌について、①「沖にこがるる」以外の掛詞を、漢字を用いて二様に書け。また、②この歌にみられる「海」の縁語をすべて抜き出して示せ。

3 () 4 ()

① () ()

② ()

ジャンル別読解演習編

3 物語(1)

基本演習 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

行き行き駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗く細きに、つたかへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることが思ふに、¹修行者あひたり。「かかる道はいかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京にその人の御もとにて文書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり
富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん

その山は、⁴ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは塩尻のやうになむあり **D**。

● 語句注 ● 行き行きて——どんどん先へ行って。 駿河の国——今の静岡県の一部。

宇津の山——静岡市と岡部町の境にある宇津谷峠。 修行者——仏道修行のために諸国をめぐり歩く僧。 文書きてつく——手紙を書いて託す。 鹿の子まだら——鹿の毛色のように、茶に白の斑点のある模様。 比叡の山——京都府と滋賀県の境にある山。延暦寺がある。 なり——姿。 塩尻——塩田で砂を円錐形に積み上げたもの。そこに塩水をかけて、塩分を凝集させた。

● 問一 ● 線部1の意味として適するものの符号を○で囲め。

問一 ——線部1の意味として適するものの符号を○で囲め。

ア 暗く細いので **イ** 暗く細くても **ウ** 暗く細いうえに **エ** 暗く細いにもかかわらず

問二 ——線部2の意味として適するものの符号を○で囲め。

ア 思いがけない **イ** 恐ろしい **ウ** なんとなくうれしい **エ** なんとなく悲しい

基本確認ドリル

1 上の文から副詞を抜き出せ。ただし、重複したものは一つとして扱ふ。

() () () () ()

2 次の俳句にある副詞を○で囲み、それに修飾されている文節に——線を施せ。

- (1) 父母のしきりに恋し雉子のこゑ
- (2) おもしろうてやがて悲しき鶉舟かな
- (3) ひやひやと壁をふまへて昼寝かな
- (4) ほろほろと山吹散るか滝の音
- (5) 梅が香にのつと日の出る山路かな

3 副詞の中には被修飾語にあるきまつた表現と呼応する(あるきまつた表現を要求する)ものがある。次の古文から副詞と呼応する語をそれぞれ○で囲め。

八重^{やへむぐら}律にもさはらずさし入りたる。南^{みな}面^{おもて}におろして、母君もとみにえものものたまはず。「今⁷までとまりはべるがいと憂^{うれ}きを、かかる御使^{みつかひ}ひの蓬^{よもぎ}生の露^{つゆ}分け入りたまふにつけても、いと恥^{はづか}づかしうなむ。」とて、げにえたふまじく泣いたまふ。「参^{まゐ}りてはいとど心^{こゝろ}苦しう、心肝^{こゝろ}も尽くるやうになむ。』と、典^{ないし}侍^{のすけ}の奏^{そう}したまひしを、もの思^{おも}うたまへ知^しらぬ心地にも、げにこそいと忍^{しの}びがたうはべりけれ。」とて、ややためらひて、仰^{おほ}せ言^{こと}伝^{つた}へ聞^きこゆ。
〔源氏物語「桐壺」〕

○ 語句注 ○ 命婦——帝づきの女房。 御かしづきに——大切に

お世話するために。 野分——秋先に吹く激しい風。 八重

葎——生い茂った雑草。 南面——正殿の南側に面した部屋。

おろして——車から降ろして。 蓬生——蓬の生い茂った所。

「蓬生の露分け入る」で、荒れた家を訪れるの意となる。

典侍——女房の役職の一つ。 内侍司^{ないしのかみ}の次官。

問一 〜〜線部①〜③の読み方を現代かなづかいで書け。

① () ② () ③ ()

④ () ⑤ () ⑥ ()

問二 ——線部1「けはひ」は何のけはいか、次の符号を○で囲め。

ア 命婦の心情 イ 母君の様子 ウ 邸のありさま

問三 ——線部2「人」とはだれをいうか。

() () ()

問四 ——線部4にはある歌の意味が引用されている。その歌は次の

どれが適当か、符号を○で囲んで示せ。

ア むば玉の闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけり
イ 月も出でて闇にくれたる^{あはれ}姉^{あね}捨^{すて}に何とて今宵たづね来つらむ
ウ 人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

問五 ——線部5は何を言おうとしたものか、次の符号を○で囲め。

ア 母君の寂しい心 イ 庭の荒れはてた状態
ウ 訪れる人のいないこと エ 月の光の明るさ

問六 ——線部3・6を現代語訳せよ。

3 () 6 ()

問七 ——線部7はどういう意味か、次の符号を○で囲め。

ア 生き残っている イ 宮仕えに出ないでいる
ウ 邸にとじこもっている エ 娘に心を残している

問八 ——線部8は、典侍がだれに言った言葉か。

() () ()

問九 ——線部A・Bについて、次の文の空欄に適する語を、あとから選び、それぞれ符号を()に入れよ。

Aは()の()に對する敬意を表した()の()であるが、Bは()の()であり、()の()への敬意を示したものである。

ア 四段活用 イ 下二段活用 ウ 謙讓の補助動詞
エ 尊敬の補助動詞 オ 命婦 カ 母君 キ 作者

問四 — 線部6は、だれの、だれに対するどういう心が、何によってまぎれやすいのか。

〔 〕

基本演習2 次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

1 ことし、元禄二とせにや①、奥羽長途の行脚、ただかりそめに思ひ立ちて、² 呉天に白髪の恨みを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬ境②、若し生きて帰らば③と、定めなき頼みの末をかけ、その日やうやう草加といふ宿にたどり着きにけり。

○ 語句注 ○ 行脚 — 諸方をめぐり歩くこと。 境 — 土地・地方。 定めなき頼みの末をかけ — あてにならないわずかな期待を将来にかけて旅立ち。

問一 — 線部1によって書かれた紀行文を何というか。

〔 〕

問二 — 線部2はどういう意味か、次から適するものを選び符号を○で囲め。

- ア 遠い旅の空で髪も白くなるような苦しい思いを重ねる。
- イ 中国を旅できずに白髪となつてしまった恨みを、この旅に重ねる。
- ウ 辺鄙な地方で、老いて思いどおりにできずにはがゆい旅の日を重ねる。

問三 ①②③には省略語が入る。そこに適する語句を現代語で答えよ。

③ () ① () ② ()

(2) 7 () 6 () 5 () 4 ()
 — 線部2・3・4・7は、だれの、だれに対する敬意か。

7 () 4 () 3 () 2 ()
 〜〜線部を現代語訳せよ。

〔 〕

演習 1

次の古文を読み、あとの問いに答えよ。

箱根山に入るに、初音が原といふ所を過ぐ。枯れたる杉の群ら立てるうちに、鶯の雛ひなどもの巢立ちたるが、多く鳴くを聞くに、春ははやおくれたれど、なほめづらしき心地す。「何某なにがしの僧正に聞かせ奉らましかば、ほととぎすならでも思1すらんよ。」などいひて、すける人々は歌よむもあるべし。三谷みやなどいふあたりは、緑の林茂りたる陰をたのみて、世に知らぬ者の、旅行く人をわづらはし4しこと、昔はありしにこそ。今は里人の家居もあまた立ち続きで、道広き御代なれば、心ゆるして馬の上、輿こしの内などにある限りは、ねぶりてさへも行くなり。山中といふ所に糸桜の見ゆるを、

玉くしげ箱根の山の糸5ざくらあけなばいかが夜のみぞ見む

といへば、月の夜などは、この歌もあはれならんとて笑ふ。げに旅にていひいづることは、常のに今ひとときは劣りてわれさへ覚ゆれど、後ひきなほさんものうくて、さて置きしなり。〔庚子道の記〕

○語句注 ○ 箱根山——神奈川県・静岡両県境にある山。あとの「三

谷」「山中」は箱根山中の地名。 何某の僧正——この人の歌に

「聞きたびにめづらしければほととぎすいつも初音の心地こそす

れ」がある。 緑の林——中国の故事から、盗賊の意を含む。

輿——昔の乗り物の一つ。 糸桜——枝垂れ桜。

問一——線部2・6の主語を答えよ。

2

6

問二——線部3の意味は次のどれか、適するものの符号を○で囲め。

- ア 用事のない人々
- イ ほととぎすを好む人々
- ウ 鶯の好きな人々
- エ 風流な人々

問三——線部1、何をどう「思す」というのか。語句注の歌を参考にして答えよ。

問四——線部4・5を文法的に説明せよ。

4

5

問五 文中にある①枕詞を抜き出して示し、②その修飾する語を書け。

①

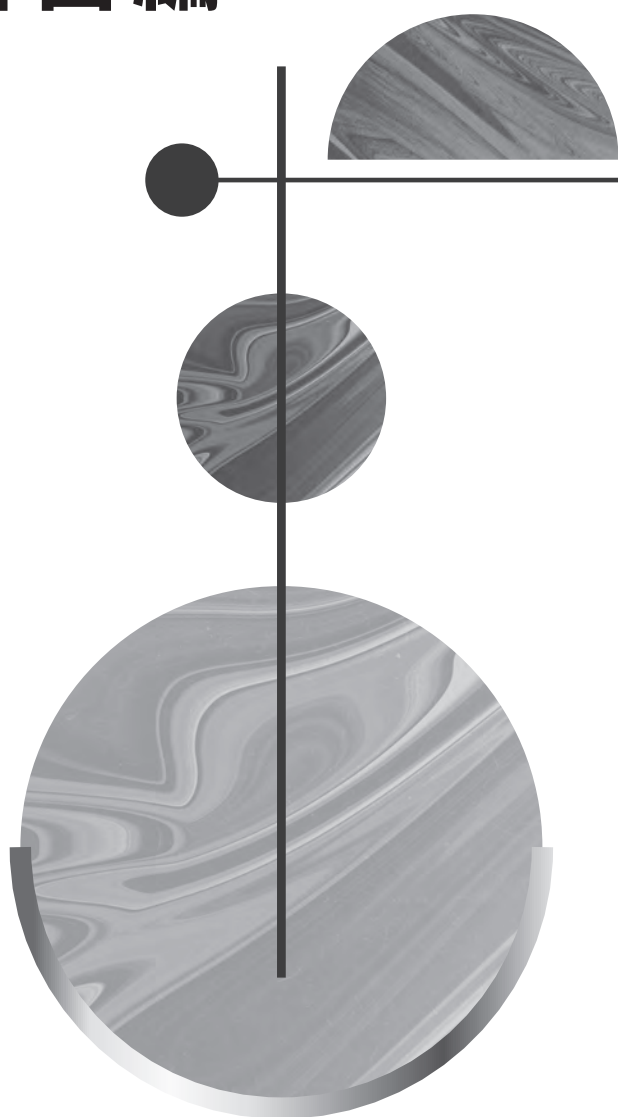
②

問六——線部7を現代語訳せよ。

高校ゼミ
Essence

古文Ⅱ

解答編



① 主語(動作の主体)を指摘する

(P. 4~7)

例文演習

問一

① 1 かいもちひ

2 僧たち

3 僧たち

4 僧 5 児 6 僧たち

② A 言ひけるを

B 待ちみたるに

問二 E

(現代語訳)

これも今は昔のことであるが、比叡山に一人の児がいた。僧たちが、夜の手もちぶさたに、「さあ、ぼたもちを作ろう。」と言ったのを、この児は、期待して聞いた。そうかといって、作りあげるのを待つて寝ないでいるのも具合悪いだらうと思つて、片すみに寄つて、寝たふりをして、(ぼたもちが)できあがるのを待つていたところ、もう作りあげた様子で(僧たちが)集まつてがやがや騒いでいた。この児は、きつと起こしてくれるだらうと、じつと待つていると、僧が、「もしもし。お起きください。」というのを、うれしいとは思ふものの、たつた一度で返事をするのも、待つていたのかと(僧たちが)思うときまりが悪いと考えて、もう一度呼ばれて返事をしようと、我慢して寝ていた。

基本演習

問一

1 作者(清少納言)

2 そばにある人

3 作者

4 そばにある人

5 大藏卿

6 作者

問二 A 大藏卿

B そばにある人

(現代語訳)

大藏卿ぐらい耳の鋭い人はいない。本当に蚊のまつげの落ちるのも聞きつけなざるほどであった。

職の御曹司の西面に(私が)住んでいたところ、大臣家の新中将様が宿直で、(私が)話などしていたところ、そばにいる女房が、「この中将様に扇の絵のことを言いなさい。」とささやくので、「すぐに、あのお方がきつと(席を)お立ちになるでしょうから(それから)ね。」と、とてもひそかに伝えるのを、その当人さえ聞きとれずに、「なんなの、なんですか。」と耳を傾けてくるのに、(大藏卿は)遠くに座つていて、「しやくにさわる。そうおっしゃるなら、今日は(席を)立つまい。」とおっしゃつた、どのようにして聞きつけなざるのだらうかと驚きあきれたことだつた。

(解説)

登場人物は作者・そばにある人・大藏卿。新中将は名は出るが動作に關係ない。文中で大藏卿が「かの君」、そばにある人が「その人」と言い換えら

れているが、この人物がつかめれば、この基本演習はやさしいはずである。

基本確認ドリル

1 この／児、／さだめて／おどろかさ／んず／らん／と、

2 待つていたのかと思うと困ると考えて、 3 その人でさえ聞きつけることができないで、 4 驚きあきれたことだつた。

(注) 2の連語「もぞ」は、悪い事態を予測し、そうなるのは困るといふ危惧、心配を表す。 3の「え……打消」は、あいだに入った動作を不可能とする働きがある。

演習1

問一

① ② ③

① ③ ②

① ③ ②

②

6 ① 7 ②

問二

1 いとしい。かわいい。

7 かわいいそう

だ。気の毒だ。(注) 7の意味は、しみじみと心打たれる・感動する、でもよい。 問三 A 「已然形十ば」で、順接の確定条件を表す用法。

B 「未然形十ば」で、順接の仮定条件を表す用法。

(現代語訳)

ある姫君に人目を忍んで通う男がいたのだらう、たいそうかわいらしい子供までできたので、(男は姫君を)いとしいと思い申しあげるもの、やかましい本妻がいたのだらうか、(訪れは)途絶えがちでいるうちに、(子供は父親を)忘れずたいそう慕ってくるのがかわいらしくて、時々、住んでいる所に連れて行つたりするのを、(姫君は)「困ります」などと言わないでいたのだが、しばらく間を置いて(男が姫君の所へ)立ち寄つたところ、(子供が)たいそう寂しそうにしていて、(父を)珍しいと思つたのだらうか、(慕つてくる。男は)頭を撫でながらじつと見ていたが、とどまることのできない用事があつて出て行くのを、(子供は)習慣になつていたので、いつものようにひどくあとを追う、それがかわいらしく思われて、しばらくそこに立ちどまつて、「それでは、さあ」といって、抱き上げて出たのを、(姫君は)たいへんつらそうに見送つて、前にある火取りをいじりながら、

子供までがこんなあなたを慕つてそわそわして出て行くのならば、香を薫く火取りではないが、私は一人ですますあなたを思いこがれることでしょう。

と男に聞かせるともなく言うのを、屏風びょうぶの後で聞いて、(男は)とても気の毒だと思つたので、子供も(姫君に)返して、そのまま(その家に)自然と

どまったのだ。

(解説) 問一 登場人物が示されているので、前後の文脈の流れを正しく追えば主語はつかめる。むずかしいのは問いにない「めづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見ぬたりし」の続き具合だけである。この部分は(現代語訳)参照。

問三 基礎的文法事項である。仮定・確定、順接・逆接は訳すときに常に意識していこう。

演習2 問一 ① 石清水八幡宮を拝みに行き、付属の寺社を八幡宮そのものと思ひ込み、肝心の本社に参詣しなかつた失敗。 ② あるとき思ひ立ちて、ただ一人、徒歩よりまうでけり。 ③ どんなことにも、指導者はありたいものだ。 問二 1 石清水八幡宮(の規模) 2 仁和寺にある法師 3 石清水八幡宮 4 何事

(現代語訳) 仁和寺にいた法師が、年を取るまで石清水八幡宮を拝まなかつたので、情けなく思つて、ある時思ひ立つて、たった一人で歩いてお参りした。(そして末社の)極楽寺や高良神社などを拝んで、(石清水八幡宮とは)これだけのものと合点して帰つて来た。そして、同僚に向かつて、「長年思つていたことを果たしました。(話)聞いていた以上に、石清水八幡宮は尊くいらつしました。それにしても、お参りに来た人みな山に登つたのは、(山の上に)どんなことがあつたのだろうか。行つてみたかったが、神様にお参りするのが目的だと思つて、山の上)までは見なかつた。」と言つた。

少しのことにも、案内者でありたいものである。

(解説) 問一 ①は、「極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て」と「山までは見ず」でつかむ。②急に思ひ立ち、連れも供もいなくなつたからである。③「徒然草」では、作者の主張や主題は、文頭か文末に多く書かれている。これを知っておきたい。 問二 主語は人物とは限らないことに注意。

演習3 問一 1 中宮定子(少納言が仕えている人) 2 「集まりさぶらふ」人の一人(少納言の同輩の女房) 3 作者(清少納言・少納言) 4 中宮定子

(現代語訳) 雪がとても高く降り積もつた日、いつもと違つて(部屋)の格子を下ろして、囲炉裏に火をおこして、(私たち女房が)話などしながら集ま

て控えていた時、「少納言よ、香炉峰の雪はどんなだろう。」と(中宮様が)おっしゃるので、御格子を(同僚の女房に)上げさせて、(私が)御簾を高く捲き上げたところ、(中宮様は)につこりとお笑いになる。

(解説) 登場人物がつかめればすぐ理解できる。「枕草子」とあれば、まず作者清少納言を思い出そう。次に、二重敬語が地の文にあれば「(仰せられる)「せたまふ)」、主語は中宮定子と考えよう。中宮でなければ天皇と思えばよい。2は、「あげさせ」の「させ」が使役であり、作者がだれかにさせたことを知る。そうすれば「集まりさぶらふ」人の一人だとわかるだろう。

設問パターン別演習

2 空欄補充問題(内容)

(P. 85-11)

例文演習

- (1) ウ (2) ケ (3) エ (4) オ (5) イ (6) コ (7) ク (8) カ (9) キ (10) ア

(現代語訳) (1) 腹立たしいもの、急用のある折に訪ねて来て長話をする客。

(2) 興ざめするもの、昼ほえる犬、……火をおこしていない囲炉裏。

(3) めつたにないもの、髪に褒められる婿。また姑によく思われるお嫁さん。

(4) ながにがしいもの、教養のある人の前で、教養のない人が、

もの知り顔の声で人の名などを言ったこと。 (5) 所在なきの慰むもの、

基・双六・物語。 (6) 胸がどきつとするもの、親などが気分が悪いと

いって、ふだんと違つた様子であること。 (7) かわいらしいもの、瓜

に描いた幼児の顔。雀の子がちゅうちゅう鳴くとびよんびよんとやつて来

ること。 (8) じれつたいもの、急ぎのものを縫う時に、薄暗い中で針

に糸を通すこと。 (9) 気がかりなもの、十二年間の山(比叡山)ごもり

をする法師の母親。 (10) 優雅なもの、ほっそりとして美しい貴族の若

者の直衣姿。

基本演習

- 問一 ① オ ② キ ③ ア ④ カ ⑤ イ ⑥ エ ⑦ ア ⑧ ウ 問二 人とすみか

(現代語訳) 流れゆく川の流れば絶えないで、しかももとの水ではない。淀みに浮かぶ水の泡は、一方で消えると一方でまたできて、(だが)長く消えないでいる例はない。世の中に生きている人とその住みかまた川の流れや

蔭の絵とを合わせて」と書いてあるから、この「竹取物語」が物語の最初のものであったのだろうか。その「竹取物語」は、だれがいつの時代に作ったかははっきりわからないけれども、たいして古いものとも思えない。延喜年間よりは後のものと思われる。そのほか「竹取物語」と同類の昔の物語はいくつも、この「源氏物語」以前にも、数多くあったと伝わり、その題名などが多く伝わっているが、(名前だけ残って物語そのものは)後世に伝わっていないものが多いようだ。また「源氏物語」と同時代、またそれより後の物語も多くあって、現在の世にもあれやこれやたくさん残っている。「栄花物語」の「煙の後」の巻に、「物語合せをするといつて、今新しく(物語を)作って、左右に(人を)分けて、二十人で合わせることをなささうたいそうおもしろかった」と言っているのを見ると、その「煙の後」の巻に描かれた) ころにも(物語を)多く作ったのだ。

(解説) 設問はすべて指示語とそれに準じたものである。指示語のさすものゝ正しくつかむためには、まず全部の読解からはじめる。その部分だけで考えるのは誤りのものである。指示語のさすものは問題文の中にあり、省略されることはない。そして、ふつうは指示語より前にさす内容は書かれている。だから初めからいいいに読むことが大切なのである。

設問パターン別演習

⑤ 会話を指摘する

(P. 20 ~ 23)

例文演習

問一 過ちす——降りよ かばか——言ふぞ そのこ——に候

ふ 問二 1 作者(兼好法師) 2 高名の木登り(といひし男)

(現代語訳) 木登りの名人と(世間の人が)言った男が、人を指図して、高い木に登らせて梢を切らせた時に、非常に危なく見えなうちは注意らしいことも言うこともなくて、降りる時に、軒の高さぐらいになって、「失敗をするな。気をつけて降りろ。」と言葉をかけたので、(見ていた私が)「これくらい(の低さ)になったからには、飛び降りるとしても降りられよう。どうしてそのように言うのか。」と申しましたところ、「そのことでございませう。(高くて)目がくらみ、枝が(折れそう)で危ないうちは、自分がこわがって(注意して)おりますから(何も)申しません。失敗は、安心できる所に

なつて、きつとしかすことでございます。」と言う。

基本演習

問一 「女房やさぶらひ給ふ」「出でて……誰ぞとよ」「こは、誰そ。……きはやかなるは」「おい、この君にこそ」「いざいざ……語らむ」

問二 中宮定子・作者(清少納言) 問三 1 中宮定子 2 作者

3 「女房やさぶらひ給ふ」と声をかけた人(の一人)

(現代語訳)

五月のころ、月もなくとても暗い夜に、「女房方は(中宮様のおそばに)控えていらつしやいますか。」と、何人もの声で呼ぶので、(中宮様が)

「出てみなさい。いつもと違って呼ぶのはだれかしらね。」とおっしゃるので、(私が)「これはどなたですか。たいそう大げさで、突拍子もないことですわ。」と(出ていって)言う。(相手は)何も言わないで、御簾を持ち上げて、がさつと(物を)差し入れるのは、呉竹であった。(私が)「まあ、『この君』でしたか。」と言うのを聞いて、「さあさあ、この(清少納言が竹の故事を知っていた)ことをまず殿上の間に行つて(皆に)話そう。」と言つて、式部卿の宮の源中将や六位(の藏人)たちなど、そこにいた人は立ち去っていく。

(解説)

問一 すべて会話を指摘する「と」と「て」がある。そこに注目。会話の始まりは、文脈の流れでつかむ。問三 1は最高敬語(二重敬語)である。

「枕草子」での最高敬語はまず中宮定子を考え、次に天皇を考えればよい(まれに定子の父藤原道隆などもある)。2はだれとも書いてない。こういうものは作者である。3は特定の人物名では答えられない。「式部卿の宮の源中将、六位藏人なども」ではすっきりしない。こういう時は、文に示された動作をつかんで、できる限りわかりやすく答えるといい。

基本確認ドリル

1 てんじょうびと くらうどのとう このえふ に

ようご こうい ないし とねり うねめ かんだちめ

2 動詞「言ふ」の尊敬語「仰す」の未然形+尊敬の助動詞「らる」の已然形。

(注)藏人頭は「くらうどのかみ」とは読まない。上達部は「かんだちへ」とも読むが、ふつうは「かんだちめ」である。

演習1

問一 最初と最後の文節で示す。「五条三位入道の……はべりし」・「かの……なりぬる」・「わが……語りたまへ」 問二 御詠の——と思ふ

世にあ——いかに 問三 夕され——まふる いさ、よ——からず

問四 (現代語訳) 参照。 問五 おもて歌

(現代語訳) 俊恵が言うことには、「五条三位入道のお邸におうかがいした折

に、「(あなたの)お詠みになった歌の中では、どれがすぐれているとお思いですか。世間の人はさまざまに定めておりますが、その意見を(そのまま)取りあげることではできません。はっきりと(お考えを)お聞きしたいと思ひます。」と申しあげたところ、

「夕方になると野辺を吹く秋風が身にしみて感じられるが、鶉も秋風を感じて鳴くようである。この草深い深草の里では。

この歌を、私にとつては代表的な歌と思っております。」とおっしゃったので、俊恵がまた言うことには、「世間で広く申しておりますのは、

(遠くの白雲を一面に咲いた桜の花かと思つて)桜の花の姿を幻影として眼前に見る感じで、白雲のなびく山の峰を(桜を追つて)いくつも越えて来てしまつたことであるよ。

(という歌でして、)この歌をすぐれているように申しておりますのはいかがでしょうか。」と申しあげると、「さあ、世間ではそのように定めておりますよ。か。(私は)存じません。(それでも)やはり自分は前の(夕されば)の(歌とは比べて言うことはできません。という)ことでした。」と語つて、このことについて内々の話として申したことは、「あの歌は「身にしみて」という第三句が非常に残念に思われるのです。これくらい立派にできた歌は、自然の情趣を(主観を入れずに)あっさりと表現して、ただそれとなく身にしみたであろうと思わせていてこそ、奥ゆかしくもあり優雅でもあるのです。(初句・二句と)すばらしく詠み続けていつて、歌の中心としなければならぬ(第三句の)ところを、はっきりと表現したので、ひどく情趣が浅くなつてしまつたのですよ。」と言つて、その次に、「私の歌の中では、吉野の山が曇つて雪が降ると、そのふもとの山里ではしづれが降り続くことだ。

これを、あの(五条三位入道のおもて歌と)同類のものにしようと思ひます。もし後世において(俊恵の代表歌)はつきりしないと言う人でもいたならば、(俊恵が自分で)「こう言つた。」とお話してください。」と言つた。

(解説) 問一〜三 会話を受けたと「とて」を知り、逆に会話の始まりをつかまう。「いはく」申ししは「のあるものもある。会話文中の会話文も同

じである。問四 疑問の「や」、敬語の「はべるらん」知りたまへず」、過去の助動詞「しか」、敬語の「語りたまへ」が解釈のポイントである。問五 指示語の把握である。

演習2 問一 「尙白が難に、……聞きはべるや。」「尙白が難当たらず、……今日の上にはべる。」「しかり、……劣らざるものを。」「この一言……真なるかな。」「汝は、……語るべき者なり」 問二 ア 問三 行く歳

問四 惜春の情・春を惜しむ心 問五 ウ・エ

(現代語訳) 古人も琵琶湖に春を惜しんだが、自分も親しい近江の国の人々と、過ぎ行く春を惜しみあつたことだ。

先師(芭蕉)が言うことには、「(この句についての)尙白の非難に、『近江は丹波にも、行く春は行く歳にも置き換えられるだろう。』と言つている。お前は(これを)どう聞きますか。』去来が言うことには、『尙白の非難は当たつていません、(近江だから)琵琶湖がほんやり霞んでいて、春を惜しむのにふさわしさがあるはず。そのうえに(この句は)現実の体験に基づいた実感の句であります。』と申しあげる。先師が言うことには、『そのとおりだ、古人もこの(近江の)国で春を愛惜することは、都(で)春を惜しむ気持ち)に少しも劣らなかつたのだからねえ。』去来が言うことには、『この一言は心に深く感じました。もし年の暮れに近江にいらつしやるならば、どうしてこの(行く春を惜しみあう)気持ちと同じに、行く年を惜しみあうという)感動がございませうか。もしも春の終わりに(寒い山国の)丹波にいらつしやるならば、もちろんこの(行く春を惜しむ)気持ちには浮かばないでしょう。自然のもつ趣が人を感動させるといふことは、真理なのです。』と申しあげる。先師が言うことには、『お前は、去来、一緒に俳諧を語ることできる者だ。』と、とりわけお喜びになつた。

(解説) 問一 「いはく」の下から会話は始まり、先師の二か所を除き」との前で終わっている。「と」のない部分は、会話のすぐあとに「去来いはく」があるので、下へ続かないとわかるだろう。問二 話題は「行く春」を近江で惜しむことの必然性についてであるから、当然「近江の国」である。問三 尙白の非難を否定しているところで、次の「行く春……浮かぶまじ」と対応した部分だと気づけば、「行く春」に対する「行く歳」とつかめる。問四 きびしい

山国では行く春を惜しむ感興は起こらないとしている。問五 先師は「はせを」のことである。また、尙白は句の言葉が入れ換えられるのだから表現の必然性がないと非難したのである。それに対し、去来は、その国の風土によって、その国の情感、そこから生まれる文学的伝統はあるのだと悟ったのである。

設問パターン別演習

⑥ 敬語に関する問題

(P. 24 ~ 27)

例文演習

- 問一 1 動詞・尊敬語 2 補助動詞・尊敬語 3 動詞・尊敬語 4 補助動詞・謙讓語 5 動詞・謙讓語 6 動詞・尊敬語 7 補助動詞・丁寧語

(現代語訳)

「お前、心の幼い愚か者よ。わずかばかりの善行を翁(お前)が作ったことよって、お前の助けにと考えて、ほんのしばらくの間とって(かぐや姫を月の国から)下したのだが、多くの年月、多くの黄金を(月の国が)くださって、(お前は)別人のように(裕福)になってしまった。かぐや姫は罪を犯しなされたので、このように卑しいお前の所に、しばらくおいでになったのだ。(だが、その)罪を償う期限が終わったので、このように迎えるのに、翁は泣き喚くが、(引き止めることは)不可能なことだ。早く(姫を)お出し申しあげろ。」と言う。翁が答えて申しあげるには、「かぐや姫を養い申しあげることが、二十余年になりました。(あなた様が)ほんのしばらくの間とおっしゃるので、疑わしくなりました。また、別の所に、かぐや姫と申しあげる人がいらっしやるのでしよう。」と言う。

基本演習

- 問一 御息所・帝(天皇)・母君 問二 1 帝 2 御息所
問三 3 帝 4 御息所 5 帝 6 御息所 7 母君

(現代語訳)

その年の夏、御息所はちょっとした気持ちから病気になる。(宮中から実家へ)退出しようとなさるが、(帝は)お暇をどうしてもお許しにならない。ここ数年來、いつも病気がちでいらっしやるので、見慣れていらっしやあって、「やはり(宮中で)様子を見なさい。」と、おっしゃるのだが、(御息所の病状は)日に日に重くおなりになって、わずか五、六日の間にたいそう衰弱したので、母君が、泣く泣く(帝に)申しあげて、(御息所を)退出お

させ申しあげなされる。

(解説)

問一 帝の名が古文に示されていないが、最高敬語でつかむ。「源氏物語」の地の文に最高敬語があれば、まず天皇と考える。問二 登場人物がつかめれば主語はわかるだろう。問三 5・6の謙讓語に注意。「奏す」は天皇にだけ用い、「啓す」(皇后・皇太子・院などだけに用いる)などとともに絶対敬語と呼ばれる。

基本確認ドリル

- ⑥ キ 1 ① イ ② ウ ③ オ ④ エ ⑤ ク

(注)基本演習では「許させ給はず」のたまは「するに」の最高敬語がある。また、「まかでさせたまつり給ふ」が二方面への敬語である。ここで、一つはつきりさせておこう。二方面への敬語を含め、敬意の主体(敬意を表すもの)は、
・地の文では作者(書き手) ・会話文では話し手
である

演習1

- 問一 ① ア ② イ ③ ア ④ ウ ⑤ ア
⑥ エ 問二 1 当然張れませんので、 2 まったくまだ見たことのない骨の様子です。 5 一つでも(書き)落とすな。 問三 「まだ見ぬ骨」をとらえて、くらげには骨がないから、それでは「くらげのななり」と即興にしゃれて言った。 問四 ウ 問五 A ④ア ⑤イ ⑥カ
E ④ウ ⑤ア ⑥エ

(現代語訳)

中納言様が(中宮様のところへ)参上なさって、御扇をさしあげなされる時に、「隆家はすばらしい(扇の)骨を手に入れました。その骨に(紙を)張らせてさしあげようと思うのですが、ありふれた紙は当然張ることができませんので、(ふさわしい紙を)探しているのです」と申しあげなされる。

「その骨は」どんなものですか。」と(中宮様が)お尋ね申しあげなされると、(中納言様は)「何もかもすばらしゅうございます。『まったくまだ見たことのない骨の様子です。』と人々は申します。ほんとうにこれほどの(すばらしい骨)は見る事ができませんでした。」と、得意げに声高くおっしゃるので、(私が)「まだ見たことがないとおっしゃる、)それでは、扇の(骨)ではなくて、くらげの(骨)なんでしょう。」と申しあげると、(中納言様は)「す

りますと、涼しくございます。」と申しあげる。(その時に)先師が言うことには、「(宗次よ)それが発句なのだ。」と言ひ、今の句に作つて、「(猿蓑)に」入れなさい。」とおっしゃつた。

(解説) 問一 大意とは、その文章のだいたいの意味ということである。だから正確な読解力が要求される。そして、字数制限があればそれに従わなければならない。問二は要旨把握といつてもよい。評論文などでの筆者の言おうとすること、述べようとする中心眼目をとらえるのである。「じだらくに居れば涼しく侍る」「これ発句なり」がポイント。気ままな日常のくつろぎへの感動→日常生活の中にある作りものではない生きた感動、これが発句だとしているのである。

設問パターン別演習

11 主題・要旨に関する問題 (2) (P. 44 ~ 47)

例文演習 問一 紀行文には紀氏・長明・阿仏尼の名作があり、私の作品はとも及ばないものだから、読み捨ててほしい。(48字) 紀行文には先人のすぐれたものがあり、私の作品はとりとめない印象を書いたものだから、読み捨ててほしい。(50字) 問二 1 土佐日記 2 十六夜日記

(現代語訳) そもそも、紀行文というのは、紀貫之や鴨長明・阿仏尼(などの先人)が、すばらしい文を書いて旅情を書き尽くして以来、そのほかのものはみな様子が似かよつていて、その(すぐれた三人の)かすをなめるだけで新味を出すことができないでいる。まして(私のような)知恵浅く才能の乏しい者の筆では、(あの三人の名文に)肩を並べることなどできるはずはない。——略——そうはいうものの、(旅で見た)その所々の風景が心に残るし、山中の宿や野中の宿のたえがたい旅愁も、一方では話の種となり、自然に親しむ手がかり(になる)ともあえて考えて、忘れないでいる所々(のと)を、前後もかまわずに書き集めましたから、やはり酔つた者のたわごとと同じで、寝ている人がうわ言を言うようなものにみまして、(これを読む)人はまた聞き流してください。

基本演習 問一 世の中のこととは定めがないと心得ることだけが、真実で間違いないことだ。(34字) 人生はすべてが予定通りいかなない不定のものだと

思うことだけが真実で間違いない。(38字) など。 問二 ぬ 問三 かねて思ひつるには似ず。

(現代語訳) 今日日はこれこれのことをしようと思つても、意外な急用がまず出てきて忙しく(一日を)過ごし、(また、自分の方で)待つ人はさしつかえがあつて(やつて来ず)、あてにしている人はいや来て、期待していた方面のことははずれて、思いがけない方面のことだけはうまくいつてしまふ。気がかりに思つていたことは何事もなく、(反対に)安心してられるはずのことはたいそう心配になる。(このように月日が)日々に過ぎていく様子は、前もつて考えていたこととは似ていない。一年の間もこのようなものである。(人の)一生の間もそのとおりである。(しかし)前々からの予定が、みならずれていくかと思つと、たまたま違わないこともあるので、いよいよ物事は(こうだと)定めにくい。(人の世のことはすべて)定めがないのだと心得てしまうことだけが、真実であつて間違いないことなのだ。

(解説) 問一 「徒然草」の主題は頭括型か尾括型が多い。ここは尾括型である。それを知ろう。 問二 「待つ人はさしはりありて、頼め()人は来たり」「頼みたるかたのことはたがひて、思ひよら()道ばかりはかなひぬ」「わづらはしかりつることはことなくて、安かるべきことはいと心苦し」は上下が対句であり、この三つのカギの中も、また対句的表現である。それぞれ上下で逆のことを言っていることに気づこう。「待つ人」「頼みたるかた」の逆であれば、()には打消が入るとわかる。最後の()は文の流れから内容をつかむのである。 問三は指示語である。すぐ上の「かくのごとし」と同じものをさしている。

基本確認ドリル 1 (1) 下二段活用(未然形) (2) 四段活用(連用形)

(3) 上一段活用(未然形) (4) 下二段活用(連用形) (注) 活用形は参考のためにつけたが、答えとして要求されていない。

2 (1) 連体詞 (2) 名詞 (3) 形容動詞

演習1 問一 おなじ人を 問二 ○平凡に和歌でなく漢詩で答えたこと。○答えた内容が場面(折)に一致していたこと。 問三 雪が降り積もり、その雪を盛った様子を梅を挿し、月の明るい折。 問四 かく折にあひた

ることなん言ひがたき。 問五 3 村上天皇 4 兵衛の藏人

問六 ① 蛙・帰る ② 沖・漕ぐ(こがるる)・あま・釣り 問七 工

(現代語訳) 先代の村上天皇の御代に、雪がたいそう降つ(て積もつ)たその雪を、(天皇が)容器にお盛りになつて、(そこに)梅の花を挿して、月のたいそう明るい夜に、「これについて歌を詠め。どのように詠んだらよいだろうか。」とおっしゃつて)兵衛の藏人にお与えになつたところ、(兵衛の藏人が)「雪月花の時」と(白居易の漢詩の句を)申しあげたのを、(天皇は)たいそうおほめになつた。「和歌などを詠むのはありふれたことである。このように場合に合致した故事は言いにくいものだ。」とおっしゃつた。

同じ兵衛の藏人をお供にして、殿上の間になれも控えていない時に、(天皇が)立ちどまつていらつしやると、炭櫃に煙りが立つたので、「あれは何か、ちよつと見てこい。」とおっしゃつたので、(兵衛の藏人が)見て帰つて来て、

海の沖に漕がれているのを見ますと、漁師が釣りをして帰るのでした。(炭櫃の赤くおきた炭に焦げているのを見ますと、蛙でした。)と申しあげたのは見事(な返事)であつた。蛙が(炭櫃に)飛び込んで焼けているのであつた。

(解説) 問一 段落分けは内容を問う場合、よく用いられる設問形式である。

前半は白居易(白楽天)の漢詩句を用いて、後半は古歌(わたつ海の)の歌は古時代の歌人藤原輔相の歌を引用してうまく言葉掛けて用いた、兵衛の藏人の機知に富んだ答えぶりの逸話である。問二 答えはほめた帝の言葉にある。簡潔にとあるし、問三が「折を問うているので、これは説明する必要はない。問三 「折」は「雪月花の時」を地の文で確かめよう。問四 「なん(なむ)」の結びは連体形である。こういう時に「なん」を除いてはいけない。文としては強められた文のままで活用形を改めるのである。問五 登場人物は二人であり、3には最高敬語が使われ、4には謙讓語が用いられている。問六 ① 「蛙の飛び入りて焼くるなりけり」と語句注の「沖にこがるる」を見ればつかめる。問七は問一の(解説)参照。

演習2 問一 1 イ 4 ウ 問二 十歳ぐらいになること。

問三 物の道理のよくわかつている人・精神的に幼くない人。問四 まだ精神的にも幼い少女の将来を心配している。(22字) 自分は年老い、母も

なく幼い少女の将来に不安を抱いている。(28字) など。問五 将来のはつきりしていない少女を残しては死んでいけない。(27字) 幼い少女の将来が心配で死んでも死にきれない。(22字) など。

(現代語訳) 尼君は、(少女の)髪をかきなかきなかして、「とかすことを面倒に思つていらつしやるけれども、きれいなお髪だこと。(それにしても)とてもたわいなくいらつしやるのが、かわいそうで気がかりです。これくらい(の年)になると、ほんとうにこんな(幼稚)ではない人もいるものなのに。(あなたの母君の)亡き姫君は、十歳ほどで父君に先立たれた時には、とてもよくものはわかつていらつしやりましたよ。(それに比べてあなたは)たつた今私が(あなたを)お見捨て申しあげ(て死を迎え)たならば、どうやってこの世に生きていらつしやろうとなさるのでしよう。」と言つて、(尼君が)ひどく泣くのを(垣間見)をしている源氏が御覧になるにつけても、(源氏は)わけもなく悲しくなる。(少女は)子供心にも(尼君の)気持ちかわかるので、やはり(尼君を)じつと見つめて、伏し目になつてうつつむいた時に、(前に)こぼれかかった髪が、つやつやとして美しく見える。

成長していく先の落ち着き場所もわからない(幼い)少女を残してゆく、露のようにはかない命の私は、消えようとしても消えてゆく行き場がありません。

(解説) 問一 1は基本古語。4は「世にあらむとすらむ」の尊敬表現の訳し方。

問二・三は指示語。少女ぐらいになればこんなでない人もいと言っている。少女は「はかなし」なのであるから、問三はその逆、それは故姫君に示されている。そして、故姫君の年はいくつだろう。問二の答えは「少女の年齢」故姫君と同じぐらいでははつきりしない。問四 「いととはかなう……後ろめたけれ」故姫君「ただ今……おはせむとすらむ」をつかんでまとめる。問五 も問四とはほ同じ。若草は少女を、露は余命の少ない尼君をたとえている。「おくらす」は、あとに残す、の意。

設問パターン別演習

12 古文の修辞法に関する問題

(P. 48 ~ 51)

例文演習

問一 ① C あをによし ② B ほととぎす鳴くや五月のあ

も、千年(の寿命)を待たないで薪たきぎにくだかれ、古い墓はすき返されて田となってしまう。(そして)その(墓の)跡さえなくなってしまうのが悲しいことである。

演習2 問一 1 ウ 4 エ 問二 ア 問三 3 ア 7 イ

問四 願はず 問五 おのが身を使ふ 問六 いかにはんや、つねに歩き、つねに働くは養性なるべし。 問七 イ

(解説) 問一 1は、親切だの意であるが内容をとらえない。4の「賞罰」は、賞の意で、罰は軽く添えたもので意味はない。「多少の金」いったん緩急あれば」と同じ用法。 問二 糸竹は弦と笛である。 問三 3は「しかし」の意味に注意。7は「いかか」が反語の副詞であることに気づこう。 問四 副詞の呼応を思い出せば簡単である。 問五 「やすし」、つまり気楽なのである。 どうしたら気楽か、「おのが身を使ふ」ほうが人を使うより気楽なのである。 問六 十単語の文・最初に副詞が三つある文・終わりが助動詞二つの文、どれでつかんでもよいが、探すめやすを持つ。 問七 「方丈記」なら、まず閑居と思ってもよいが、作者が自分の生活について言っていることを知り、次に十〜十二行目で、気ままな生き方だと知るとよい。

(現代語訳) いったい、人の友というものは、富んでいる者を尊び、(金銭的な

面で)親切な人を第一とする。必ずしも友情のある人とか、心の正しい人とかを大切にしているのではない。(それだから)ただ、音楽や自然を友とすることにしたことはないだろう。(また)人の召使であるものは、褒償が多く、(物質的な)恩恵が厚いということを第一とする。まったく、(主人が召使いを)大事にしてくれるとか、心のどかに落ち着いていられるとかは願わない。(それだから)ただ、自分の身を召使いとして使うにこしたことはないのだ。どういうように(自分を)召使いとするのかといえ、もしもしなくてはいないことがあると、その時は自分の体を使う。決しておっくうでないわけではないが、人を使い、人を世話するよりは気楽である。もしも出歩かねばならないことがあると、自分の足で歩く。苦しいといっても馬だ、鞍だ、牛だ、車だと、気苦労するよりましである。今、(自分の)体を分けて、二つの働きをする。手の召使いと、足の乗り物で、(これは)よく自分の思いどおりになっている。(自分の)心は、体の苦しみがわかって

いるので、(体が)苦しむ時には必ず休ませるし、元気であれば使う。使うといっても、たびたび(使って、度を)こすことはない。(体が働くのは)気がすまないといっても、心をいらだてることはない。ましてや、いつも歩き回り、いつも働くことは心身の健康を保つことであろう。どうして、無意味に休んでいようか。人を使つて(苦勞させるのは、仏罰を受ける行為である。どうして他人の力を借りたりしようか(借れないのだ)。——中略——すべて、このような(生活の)楽しみは、富んでいる人に対して言うのではない。ただ、自分ひとりに関して、昔と今とを比べているだけである。

ジャンル別読解演習編

3 物語(1)

(P. 60 ~ 63)

基本演習 問一 ウ 問二 ア 問三 ウ 問四 ウ 問五 エ

問六 イ 問七 京・都 問八 ●季節はずれ(真夏)に雪があること。

●山の高さ。●形の美しさ(塩尻)。 問九 ける 問十 かかる(連体詞)

道(名詞)は(助詞)いかで(副詞)か(助詞)います(動詞)

(解説) 問一 接続助詞「に」の意味である。ここは添加の意で「そのうえに」の意味。 問二 古語の意味。 問三 「修行者」が主語であることを知ろう。

問四 古文の世界では四〜六月が夏である。 問五 Aは修行者、Bは京にいる人、その人に贈った歌の中のCは、「あなたに会わない」というのであり、Bと同一人物。 問六 この歌は都の人(女性)に会いたいという歌であるが、この歌の主意と関係ない部分がある。それを考えよう。 問七 すぐ下に「比

叡の山を」とあることに注目。 問八 歌物語では歌に人物の感情が強く述べられている。その歌が雪を詠んでおり、「時知らぬ」とあるから、夏に見た雪への感動がまずある。そして、その雪を仰ぎ見て、「比叡の山を二十ばかり重ねあげ」とあることを次につかむ。三番目には、「塩尻」の形を考えてつかむ。 問九 上に係助詞「なむ」があることに着目。 問十 この品詞分解は、「かかると」いかで」を誤らなければやさしい。

(現代語訳) ずんずん先へ行って駿河の国に着いた。宇津の山に着いて、(これから)自分が入ろうとする道は、たいそう暗く細いうえに、つたや楓もみぢが茂

つて、何となく心細く、思いがけない目にあうことと(不安に)思っている
と、修行者が出会った。「こんな(寂しい)道にどうしておいでになるのです
か。」と言うのを見ると、(以前都で)会った人であった。(修行者は都へ上る
というので)都へ、(恋しい)あの人のお手元にといいわけけて手紙を書いて託
す。

駿河の国にある宇津の山にきていますが、その山の名にたいつたうつつ
(現実)でも夢(の中)でも、あなたにお会いしないことですよ。

(さらに先へ行き)富士山を見ると、五月の下旬なのに、雪がとても白く
(山の上に)降り積もっている。

時節をわきまえない山は富士山だ。(今を)いつだと思つて鹿の毛色の
ようにまだらに雪が降り積もっているのだろうか。

その山は、都(の山)にたとえるならば、比叡山を二十ぐらい積み上げた
ほどの高さで、形は塩尻のようであった。

基本確認ドリル

- 1 いと・いかで 2 (1) しきりに・恋し (2) やが
て・悲しき (3) ひやひやと・ふまへて (4) ほろほろと・散るか
(5) のつと・出る 3 (1) え——まじ (2) ゆめ——な (3) あた
かも——ごとし (4) よも——じ (5) たとひ——とも・なか——ざ

らむ (注)(1)は打消と、(2)は禁止と、(3)は比況と、(4)は打消推量と、(5)の前
者は仮定と、後者は打消推量と呼応する。 4 (1) 動詞「いたる」の連用
形に接続している完了の助動詞「ぬ」の終止形。 (2) 動詞「知る」の未然形
に接続している打消の助動詞「ず」の連体形。

演習1

問一 大臣殿の太政大臣辞退をお認め(受理)なさらないこと。(22
字・21字) 問二 3 たいそう不都合なことでしよう。 4 悪くはない
ようでございます。

問三 ウ 問四 下二段活用の謙譲の補助動詞「給
ふ」の連体形で、上の係助詞「なむ」の結びとなっている語である。

問五 ●病気になったこと。●たいそう老年であること。●今年は慎むべき
年であること。●左大臣を太政大臣にしても不安はないこと。

(解説)

問一 「用ゐる」は、よしとして取り上げる・採用する、の意である。

問二 「便なし」「けしうはあらず」の意味である。後者は「さしつかえない」の
訳でも十分。 問四 会話文の中の、上に「思ひ・見・聞き」について「給

ふ」は、まず下二段の謙譲語かと考えよう。また、文末ならば係り結びと活用
形を考えよう。 問五 「心地なやみ」「いといたう老いて」「今年なむつつしむ
べき年」(公職についていれば政務のために慎めない)「左大臣……けしうは侍
らざめり」(適任の後継者となつていて安心できる)をつかまう。

(現代語訳)

大臣殿は御病気になられて、太政大臣を辞任申しあげなさるが、
帝はまったくお取り上げにならないので、「(私は)たいへんに年老いており
ますが、帝をお見上げ申しあげませぬことが残念で、今まで参内しており
ましたのです。(しかし)今年身は慎まねばならない年でございますので、
引き籠つていようと存じます。この(太政大臣の)職に就いて、朝廷の
政務に参与申さないでは、たいへん不都合なことでしょう。(私が)辞任申
します代わりには、左大臣を(太政大臣に)任命なさいませ。そうしてもさ
しつかえはございませぬでしょう。それですから、私よりも(帝の)お世話
はきつとよくいたしますことでしょう。」と、皇太后を通して強く申しあ
げさせなさる。

演習2

問一 ④ みようぶ ⑤ のわき(のわけ) ⑥ よもぎう

問二 ウ 問三 (母君の娘の)故更衣 問四 ウ 問五 ウ
問六 3 見苦しくない程度にして過ごしていらつしやつた(が)、
すぐには何もおつしやることのできない。 問七 ア 問八 帝
問九 (最初から順に)A キ・カ・ア・エ B イ・ウ・オ・カ

(解説)

問一 古文によく見られる古語の読みである。 問二 門を入つた時
に見た情景に「あはれなり」と感じたのである。 問三 「御かしづき」の意味
をつかみ、だれがだれの世話をしたのかと、問いの前文と合わせてとらえる。

問四 アの歌は、闇の中の現実としてあの人と逢うことは、はつきりとした
夢での逢瀬といくらも違わないことだ。イの歌は、月も出ない姨捨山(あはれ
に、暗く希望もない叔母の所へ、どういふわけであなは今夜訪れて来てく
れたのでしよう。ウの歌は、親の心は闇のように分別のつかないものではな
いのだが、子供のことを思うことであれこれ迷ひ乱れてしまったことだ。以
上の歌意である。ここは母君が娘更衣の死で沈んでいることである。 問
五人が訪れないから八重律が茂るのであり、茂つても人の訪れがあれば踏
み分けられるのである。 問六 3は「めやすし」の意と敬語の「たまふ」、で

されば下へ続く逆接の語まで答えたい。6は「え……ず」の不可能と「のたまふ」の敬語の訳である。問七「この世にとどまる」である。問八下に絶対敬語の「奏す」があることに注意。問九 尊敬の「たまふ」と謙譲の「たまふ」である。敬意を表すものは、地の文では作者、会話文は話し手である。

(現代語訳) 命婦はあちらに到着して、(牛車を)門内に引き入れるとすぐに、しみじみとした気配を感じる。(母君は)夫のいない暮らしたけれど、(更衣であった)娘一人のお世話のために、(邸も)何かと手入れをして、見苦しくない程度に暮らしていらっしやるうちに、(庭の)草も高くなり、秋の心に乱れて泣き臥していらっしやるうちに、(庭の)草も高くなり、秋の激しい風に(その草が吹かれて)いっそう荒れた感じがして、ただ月の光だけが、生い茂った雑草にもさまたげられずにさし込んで(訪れて)いた。南に面した座敷に(命婦を車から)降ろして(通して)、(命婦もそうだが)母君もすぐには何もおっしゃることができない。(しばらくたつて)「今まで生き残っておりますのがとてもつらいのに、こうした(帝の)お使いが、蓬の生い茂った(庭の)露を分け入っておいでくださるにつけても、まことに恥ずかしく(存じます)。」と言って、ほんとうにこらえることができないうようにお泣きになる。(命婦は)「こちらに参りますと(想像していた以上に)いっそうお痛わしく、心も身も消え果てるように思われました。」と、典侍が(帝に)奏上なさいましたが、(ものの風情など)何もわきまえておりません私の心にも、ほんとうに耐えがたく(悲しう)ございます。」と言って、しばらく心を静めてから、(母君に帝の)お言葉をお伝え申しあげます。

ジャンル別読解演習編

4 物語(2)

(P. 64 ~ 67)

基本演習

- 問一 1 ウ 4 ア 問二 2 突然においてになった。
3 どこにおいてになったついでなのであろうか、 問三 ことさらにこそ
問四 A ①故左のおほいどの(大臣) ②謙譲 B ①泉の大将

- ②謙譲 C ①泉の大将 ②尊敬 D ①大臣 ②尊敬 E ①大臣
②謙譲 問五 この忠岑が 問六 エ 問七 古今和歌集

(解説) 問一 「まるる」に尊敬語があることを覚えておこう。 問二 2 「ゆく

りもなく」は「ゆくりなし」と同義。「ものし(ものす)」は、何かの行為をすることを表す語で、その状態によって意味をあてはめよう。多くは「ある・いる」「行く・来る」「書く」などに用いられる。3も「ものす」と「たより」(ついで・機会)の意味である。問三 「ことさらに」は、わざわざ、の意である。「こそ」の下に「参りたれ」などの省略がある。問四 この部分の登場人物は「泉の大将」と「故左のおほいどの(大臣)」と「壬生忠岑」だけである。A・B・D・Eは地の文だから作者がだれに対して用いた敬語かを考え、Cは忠岑の会話文中のものであるから、だれの動作について敬意を表したのかを考える。問五前半は泉の大将と故左のおほいどのとの話で、後半は忠岑とある人との話だと、内容を読めばつかめる。問六 「むすび時にはまだしかりけり」をつかむ。「まだし」は、まだその時期に至ってない、の意。つまり、まだ早いと言っているのである。問七 「古今和歌集」の撰者四名は、それとなくでも知っていたい。

(現代語訳) 泉の大将が、今は亡き左大臣のお邸に参上なされた。よそで酒などを召しあげ、酔って、夜がたいそうふけて(から)、突然においてになったのだ。左大臣は(おやすみになっていたが)目をお覚ましになって、「(泉の大将は)どこにおいてになったついでなのだろうか」、などと(泉の大将に)申しあげなされて(また左大臣邸の召使いは)格子を上げてあわてふためたが、(泉の大将には)壬生忠岑が、お供として(付きそって)いた。(その忠岑が左大臣のお邸の)階段のもとに、松明をともしながらひざまずいて、(泉の大将に代わって)御あいさつ申しあげます。

「お邸の階段に置く霜の上をこの夜更けに踏み分けて、わざわざ(参上

いたしたのです。どこかのついでなどではございません)。
と(主人の)泉の大将は「おっしゃってあります」と申しあげます。主人の左大臣は、たいそうしみじみと心打たれて風流だと思いいになって、その夜は一晚中、お酒を(皆で)召しあげ、管弦の遊びをなされて、泉の大将も引き出物をいただき、忠岑も御褒美をいただくなどした。

この忠岑に娘がいると聞いて、ある人が「もらいたい。」と言ったのを、(忠岑は)「たいそう結構なことだ。」と言った。(やがて、その)男のところから「あのお約束なされたことは、近いうちにはと思えます。」と言ってきた返事

えも深くないのである。問六 作者(母)はどうしてみようかと言ったのか、前を見ていけばつかめる。問七 法師になれば生き物は飼えないのが仏教の戒律である。そして、鷹狩りは貴族の最も高級で優雅なスポーツである。その鷹を放つことは、貴族社会での交際をやめて、仏の道に入るといふ決意を示すのである。問八 作者者はどうしたいと言っていたのか。それをつかむ。

(現代語訳) つくづくと思いつけることは、やはり何とかして自分の思いのとおり死んでしまいたいものだと考えることよりほかのこともないのだが、ただこの一人いる子を思うとたいそう悲しい。(この子を一人前にして、信頼がおけるような妻などに預けて、(その後であれば)死ぬのも気が楽だろうとは思ったけれども、(いま私が死んでしまったら、この子は)どんな気持ちで(この世を)さまよい歩くのだろうと思うと、やはりとても死ににくい。「どうしようか。出家をして、世の中のことを思い切れるかどうかと試してみよう。」と(子に)相談すると、まだ(若くて人生経験も)深くはないのだけれども、ひどくしゃくりあげておいおいと泣いて、「(母君が)そのように(尼に)おなりになるならば、私も法師になってしましましょう。何のために(宮仕えして)世間の人と交際しまししょうか(そんなことは)はしません。」と言って、激しくおいおいと泣くので、私も(涙を)こらえることができないが、あまりの悲しさに、冗談に言いまぎらわそうと思って、「それでは(法師になったら)生き物は飼えないが鷹を飼わないで、どうなさるのでしょう。」と言ったところ、(子は)静かに立って足早に歩いて、(鷹小屋の止まり木に)とまらせてある鷹を(小屋から出して)拳にとまらせて放してしま

った。

演習2 問一 ① かた(濁)・なぎさ・浜千鳥・あと(跡) ② 「かた」に方法の「方」と海辺の「濁」が掛けられ、「なぎさ」と海の「渚」が掛けてある。

問二 姉が煙となつて昇つた野辺にはもう煙もなかつたろうが、どこを目当てに姉の墓を訪ねてお参りしたのだろう。問三 C 姉の墓はどことわからなかつたろうが、先に立って流れる涙が道しるべとなつて案内したので。

D 人の住まない野の笹原は道の跡もなく、乳母は泣きながらどんなにか姉の墓を探しあぐねたことだろう。E 見ているまに煙

は絶えてしまったのに、乳母はこの笹原の中をどうやって姉の墓を探し当てたのだろう。

(解説) 問一 ①・②ともに和歌の技巧である。①の「あと」は難解だったろうが、浜千鳥の「足跡」である。問二・三 歌の大意をつかむ設問。——線部の意味がつかめていれば90%はよい。Bの歌の「はかとは、おおよその目当て・見当の意味の「計」と「墓」の掛詞。Cの歌の「そこはかと」は、はっきりとの意味と「そこは墓と」の意味が掛けてある。またDの歌の「あとはかもなくなく」は、行く先もわからないの意味の「あとはかも無く」と「泣く泣く」が掛けられている。

(現代語訳) Aの歌 (足をとめる)干潟もない渚の浜千鳥のように、(主人を失った悲しみを)慰める方法もないのです。(主人のいなくなつた)つらく悲しいこの邸にどうして留まっていられましようか(悲しくて残っていられな

いのです)。

この乳母は、(姉の)墓所に詣でて、泣き泣き(実家へ)帰って行った。Bの歌 (姉が煙となつて)昇つたという野辺には、もう煙もなかつただろうが、いったいどこを目当てにそこが姉の墓だと探してお参りしたの

だろうか。Cの歌 そこが(姉の)墓だとはつきりわかつては行かなかつたが、(墓までの道に)悲しさから先立って流れる涙が道の案内をしたのですよ。

Dの歌 人が住み慣れていない野の笹原は(道もなく)行く先がわからないので、(乳母は)泣き泣きどんなにか(姉の墓を)探しあぐねたことでしょう。

Eの歌 見ているまに燃えて煙は絶えてしまったのに、(道も)はつきりしない(この野の笹原の中を、(乳母は)どのようにして(姉の墓を)探し(てお参りし)たの

ジャンル別読解演習編 (8) 紀行

(P. 80 ~ 83)

基本演習1

問一 1 ア 4 イ 5 ウ 問二 人やりならぬ胸さわがれつること日ごと

問三 年老いた母の病氣などの急変。

問四 作者の母に対する安否を気づかう(健康を心配する)心が、友や身分の上下にかかわらず人々との交わりによってまぎれやすい。

(解説) 「岡部日記」は江戸の国学者賀茂真淵が、故郷の遠江国(静岡県)の岡部に帰った時の紀行文である。問一 古語の意味である。4の「さが」は、ならわし・習慣。問二 この指示語は予告の指示語などといわれるもので、あとに言うことを指示語で前触れしているものである。こういう例外的な指示語もあるので注意。自分の言葉でまとめるならば「母のことを心配すること」である。問三 「急な事」ではいけない。具体的にとあるのだから、内容を添える。問四 設問の前の部分をよく読み取ることである。ただし、問

いの四つの条件をおさえないとけない。

(現代語訳)

ああ、京都にいた時は、わずかではあるものの毎年故郷に帰るな
どしたので、それほど(母のことを気づかうわけ)でもなかったけれども、
今は簡単にも(故郷へ)帰れそうもないと思い定めたので、千里もの遠く(離れた故郷に)年老いた母を残し申しあげて、(もしも母に)急変があつてもど
うして知ることができようか(知ることはできないのだ)。(また母の急変
を)知るとしてもどうして急に(母のもとまで)行き着けるだろうか(間に合
わないのだ)。現在(母に)どんなことが起きているのだろうか。どんなお気
持ちでいらつしやるだろうかなどと、自分のせいで自然に胸騒ぎのしたこ
とが毎日のようにあつたのだが、人の世のならわしは情けないもので、決
して忘れるということではないけれども、友だちもできて、自分の高い人
低い人(さまさまの人)と行き来して交わっていたうちに、一つしかない心
が(人との交わりに傾いて母を気づかう心も薄れそうに)とりまぎれがちで
月日を過ごした。

基本演習2

② を見て。

③ しあわせだ。

問一 奥の細道 問二 ア 問三 ① あろうか。

(解説)

問一 元禄二年(江戸時代)の奥羽の旅の紀行文といえ、松尾芭蕉の「奥の細道」しかないし、高校生なら、奥羽地方の紀行文だけで、この作品を思ひ出したい。問二 「呉天」とは中国の呉の国の空の下という意味で、都から遠く離れた辺鄙な所をいう。「白髪(びやく)の恨み」は、髪が白く変わるほどの苦しさを悲しい目にあうことを意味する。古文や漢文にときどき出てくる表現

なので、知っておこう。問三 俳文は簡潔な表現をするので省略が多い。

①は係助詞「や」の結びの形を考える。②③はそれぞれ「いまだ目に見ぬ境」「若し生きて帰らば」の意味から考えよう。古文で示せば、①は「あらむ」、②は「を見て」「を」目に見て、③は「しあはせならむ」「幸ひなり」などとなる。

(現代語訳) 今年は、(たしか)元禄二年で(あろうか)、奥羽地方への遠路の旅を、ただちよつと思ひ立って、遠い旅の空の下に髪も白くなるような苦しい思いを重ねることはあるが、耳には聞いてもまだ目で見えない土地(を見て)、もしも生きて帰れるならば(幸いのことだ)と、あてにもならないわずかな期待を将来にかけて、その日ようやく草加という宿場(今の埼玉県草加市)にたどり着いた。

基本確認ドリル

1 (1) 1 動詞・尊敬語 2 動詞・謙讓語 3 動

詞・謙讓語 4 補助動詞・謙讓語 5 補助動詞・丁寧語 6 補

助動詞・丁寧語 7 動詞・謙讓語 (2) 2 作者の源氏に対する敬意

3 惟光の源氏に対する敬意 4 惟光の源氏に対する敬意 7 作者

の源氏に対する敬意 (注)地の文における謙讓語は、作者のその動作の受け手に対する敬意を表すものであり、会話文の謙讓語は、話し手がへりくだって話し相手に敬意を表しているものである。これをしっかりと知ろう。(3)

病人のことを(心配に)思つて世話をしておりますので、(注)「ほどに」は、原因・理由を表す接続助詞で、「……ので……ゆえに」と訳す。

演習1

問一 2 すける人々(作者の同行の者) 6 作者 問二 エ

問三 鶯の声を、初音のように珍しく思ふ。 問四 4 四段活用の動詞

「わづらはす」の連用形に過去の助動詞「き」の連体形のついたもの。
5 下二段活用の動詞「あく」の連用形に完了の助動詞「ぬ」の未然形がつき、さらに接続助詞「ば」のついたもの。そして、「あけな十ば」で順接仮定条件となっている。 問五 ① 玉くしげ ② 箱 問六 あとで作り直す(訂

正する)のも気がすまなく(めんどうくさく)て、そのままにしておいたのである。

(解説)

問一 文脈の流れを追えばつかめる。 問二 「好く」の意味である。 問三 何某の僧正に聞かせるのは鶯の声。それを僧正がどう「思ふ」かは、語句注の歌でつかむ。【歌意】聞くたびにごとに目新しく感じるので、ほととぎす

の声はいつ聞いても初音のような気がするからだ。問四 4は「わづらはし」と形容詞で考えていたら答えられない。文意を考えていくとよい。5は「な」がつかめればよい。「ば」は未然形か已然形にしかつかないので、そこから考えるとよい。問五 枕詞とその修飾する語は、一つ一つ覚えていく。

問六 「ひきなほす」「ひきは接頭語」「ものうし」「さて」の意をつかむ。

(現代語訳) 箱根山に入ると、初音が原という所を通り過ぎる。枯れている杉の木が群がり立っている中で、何羽もの鶯のひなで巣立ちをしたのが、たくさん鳴いているのを聞くと、春はもう去ろうとしているのだけれども、やはり珍しい気がする。「この鶯の声を、あの古歌を詠んだ」何某の僧正にお聞かせ申しあげるならば、ほととぎすの声でなくても(初音のように目新しいと)お思いであろうよ。」などと言って、(一行の中の)風流な人々は歌を詠む人もあることだろう。三谷などというあたりでは、緑の林が茂っているその木陰を根城として、世に認められない者(盗賊が、旅人を困らせたことが、昔はあったのだ。(しかし)今は土地の人の家もたくさん立ち続いて、道も広く政治も行きわたっている御時代なので、安心して馬の上や、輿の中などにいる限りは、眠っていてさえも行くのである。山中という所に枝垂れ桜が見えるので、

箱根山の枝垂れ桜は夜が明けてしまつてから見たならばどんなだろうか、(山中にわびしく咲き江戸の桜などより見劣りもするので)、ただ夜だけ見ることにしよう。

(私が)詠んだところ、(同行の人々は)「月の夜などには、この歌も風情を感じてだろう。(しかし、昼間「夜だけ見よう」という歌を作ってもおもしろくない)」と言って笑う。なるほど旅先で詠み出す歌は、ふだん(家などで詠む歌よりもいまひとつ劣っていると自分でも思うけれども、あとになつて作り直すのも気がすまなくて、そのままにしておいたのである。

演習2 問一 「夕飯したためて出づるに」といっているのが、近いといっている。問二 エ 問三 ウ 問四 ア 問五 みすばらしい家にお

びしげな女が住んでいる風情。(23字)

問八 イ 問九 ① うちにこそ ② みなとに

(解説) 問一 夕飯をとってゆっくりと出ている点に着目する。問二 「名月

は敦賀のみなど」から、八月十五日少し前と知る。秋の夕暮れであり道は暗くなつていたのである。イと間違えそうだが「最も」という問いに対しては工となる。問三 「あやし」の意味。問五 「あやしの小家」と「佗しげなる女」の両方がないと不十分。「源氏物語」夕顔の巻の「かく白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲き侍りける」を思わせるので、「あやしの小家に夕顔・へちまの……戸ほそを隠す」とつかみがあるが、この部分に「かかる風情は侍れ」とあるのではなく、等裁の妻の言葉のあとにある。だから「あやしの小家」の様子だけでは半分なのである。問六 内容から考えればイしかない。問七 「枝折」の意味を知る。問八 等裁は市中といえ引つ込んだ所で、俗気を離れて隠れ住み、敦賀で月見などという風流事には気さくに興ずると、等裁の手柄が中心として述べられている。問九 ①は已然形であることに注意。当然「こそ」の結びと考える。②は「行つて見よう」である。どこへ行き、何を見るのかである。「将死にけるにや」のあとと思うかもしれないが、ここは「あらむ」の省略である。

(現代語訳) 福井は三里ほどなので、夕飯をとつてから出かけたところ、日暮れ時の道は(足もとが薄暗くて歩み)はかどらない。ここ(福井に)等裁という古くから世に隠れ住んでいる者がいる。いつの年であつたらうか、江戸に出て私を訪ねて来た(ことがあつた)。もうずっと十年以上(前のこと)である。どんなに老い衰えているだろうか、あるいはまた死んでしまっただろうかと人に尋ねますと、まだ生きていて、どこそこ(に住んでいる)と(家を)教える。(その家は)町中から引つ込んでいて、みすばらしい小さな家に夕顔やへちまが生えかかつており、(はびこっている)鶏頭やほうき草によつて戸口を隠している。そうかこの中に(住んでいるのか)と、門口をたたくと、みすばらしい女が出てきて、「どちらからお見えのお坊様でしょうか。主人はこの近くのだれそれという者の所に行きました。もし用事があればそちらへお訪ねください。」と言う。これが(等裁の)妻なのだろうと(その様子で)わかった。昔の物語にこのような趣きはあると(思いながら)、すぐに(何がし方を)訪ねて(等裁に)会つて、その(等裁の)家に二晩泊まり、(八月十五夜の)名月は敦賀の港に(行つて見よう)と旅立つ。等裁も一緒に送ろうと(着物の)裾をおかしなふうになまつりあげて、道案内(をし

しよう)とうきょうきした調子で発表する。

ジャンル別読解演習編

9 評論(1)

(P. 84 ~ 87)

基本演習

問一 文義の心得 問二 ●最初から文章の(すべての)意味を
わからうとしないのがよい。 ●まず大まかに何冊もの書物を読み、また一
度読んだ書物を何度も読み返すとよい。 ●文意のわからないところは、そ
のままにして読みすぎずのがよい。 ●よくわかっている部分を注意を払っ
て深く味わって読むのがよい。 問三 ひたすら年月長く飽きずなまけず
に、精勵し努力すること 問四 気がくじけること。

(解説) 問一 前半の段落は、①多読し、繰り返して読むことで文義の理解が
得られる。②初学より詳細な理解を望むな。理解できているところを深く味
わうべきだ。この二主旨を述べている。 問二 文脈の流れを追ってつかも
う。 問三・四 段落の初めと終わりに示されている。

(現代語訳) どのような書物を読むとしても、初学のうちは最初から文章の意
味を理解しようとしないうがよい。まず大まかにさらさらと読み、(読ん
だら)ほかの書物に移って、あれこれと読んで、また以前に読んだ書物に
常にもどって、幾度も読み返すうちには、初めにはわからなかったことも、
次第にわかるようになっていくものである。——ここに省略部分がある——

文章の意味の理解しにくいところを、初めから一つ一つ理解しようとし
ては、停滞して、(先に)進まないことがあるので、わからないところは、
一応そのままにして読み過ぎるのがよい。ことに非常に難解なこととなっ
ている部分(の意味)を、初めから知ろうとするのは、大変よろしくない。
ひたすらよくわかっているところに注意を払って、深く味わうのがよいの
である。ここはよくわかっていることだと思つて、いいかげんに(読んで)
見過ごすと、総じて細かな点の意味も理解できなくなる。また多くの理解
の誤りがおこつて、いつまでも、その誤りを悟ることができないこともあ
るのである。——中略——

学問は、ひたすら年月長く飽きずなまけずに、精勵し努力することが大

切であつて、学ぶ方法はどのような方法でもよいのであり、そんなにこだ
わらないことである。どんなに学び方がよくても、なまけて努力しなけれ
ば、成果はない。またその人その人の才能の有無によって、その成果はた
いそう違ふけれども、才能の有無は生まれついたものであるから、人の力
ではどうしようもない。しかししたい場合は、才能のない人だといつ
ても、なまけずに努力さえすれば、(努力した)それだけの成果はあるもの
である。また晩学の人でも、努力して勉勵すれば意外な成果をあげることも
ある。また時間のゆとりのない人も、(それなりに)努力を重ねていくと案
外時間の余裕のある人よりも、成果をあげるものである。だから才能の劣
つていたりことや、学ぶことの遅いことや、時間の余裕のないことによつて、
気がくじけて、(学ぶことを)やめてはいけない。いずれにしても、努力さ
えすれば、できるものだと思ふべきである。総じて気がくじけることは、
学問(する上)で最もきらいなことであるよ。

基本確認ドリル

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| B | 1 | A | 1 | オ | 2 | オ | 3 | ア | 4 | イ |
| C | 1 | ア | 2 | イ | 3 | ウ | 4 | エ | 5 | カ |
| D | 1 | ウ | 2 | エ | 3 | ウ | 4 | エ | 5 | ア |
| 7 | A | 1 | ウ | 2 | エ | 3 | ウ | 4 | エ | 5 |
| 2 | A | 1 | ウ | 2 | エ | 3 | ウ | 4 | エ | 5 |

演習1

- 問一 ① 手紙 ② つれづ ③ いみじ 問二 イ 問
三 2 その手紙をもらった時。 3 手紙 問四 印度 問五 ウ

問六 1 劣っているだろうか(いや、少しも劣らないのだ)。 4 少し
も変わることがないのも、 7 やはりこれほど結構なものは(他に)決して
ありませんまい。 問七 ウ

(解説) 問一 文脈を追つて内容のまとまりをつかむ。第一段は、手紙は結構
なもので、遠く離れて何年も会わない人の手紙を見ると、実際に会った気が
する。第二段は、所在ない時に見る昔の人の手紙、特に亡き人の手紙も今書
いたように、その当時に立ち戻る気がする。第三段は、知らない世界のこと
も文字があるので知ることができ、文字があるから今の世のことも伝えられ
るので、文字は結構なものだ。段意は以上である。 問二 第三段は多少文